

京都ノートルダム女子大学 DX推進計画（第Ⅱ期）

これからの大学教育を考えると、特に教育課程・科目の各レベルで教育のあり方そのものをDXを踏まえて捉え直すことが重要である。なかでも、本学にとって最大の課題の一つは学力多様化への対応であり、蓄積された各種データや学外資源をDXにより適切に活用することで、「やむを得ず」中位層に合わせて行っている最大公約数的な教育から、可能な限り個別最適な学修機会を提供する教育へと転換することである。

本計画では、このような状況を踏まえ、DXを通じたパラダイム・シフトにより、大学のさまざまな場面で学生一人ひとりが各人に適した、本人なりの仕方で失敗や試行錯誤を重ねる中で自ら課題を発見し解決する力を涵養する教育の基盤を整備することをめざす。

1 面接授業と遠隔授業を適切に組み合わせた教育課程の編成・実施

コロナ禍における緊急避難としての遠隔授業から、より高度な教育を行う方略の一つとしての遠隔授業を志向し、授業方法の開発・研修を推進する。デジタル化による単なる利便性向上にとどまらず、ミッションコミットメントの一つである「対話」を活性化し、アクティブ・ラーニングなど思考力・判断力や自ら課題を見つけ解決する力を育てる授業の充実を図る。その際、「越えるべき壁」としての評価基準をルーブリック等により適切に設定する。これらの方法による「ブレンド型授業モデル」の創出に向け、以下に取り組む。

- (1) 遠隔授業及びブレンド型授業を高度化し、効果的な授業の方法に関するFD研修・研究会等の実施を通じて授業の質向上を図る。
- (2) 遠隔授業及びブレンド型授業として実施する開講科目の選定作業を通じて教育課程の体系性を明確化し、大学設置基準に定める「多様なメディアを高度に利用し」た授業の60単位枠を効果的に活用した教育課程編成をめざす。
- (3) 遠隔授業と面接授業の混在に伴う授業の「出席」や「遠隔による代替措置」、授業の目標達成度の確認方法等の考え方を質保証を踏まえて整理し、多様で柔軟な履修の形態を可能とする。
- (4) 上記(1)～(3)の取組の前提となる情報（LMS、教務事務システム等に蓄積された各種データ）を高度に活用し、BIツール等による可視化・分析によりIR機能を強化する。
- (5) メタバース等の活用により、遠隔地における疑似的な実習や海外との合同授業などの可能性を広げる。

2 全ての学修者が自ら最適な学びを選び取る環境の整備

学修者は、教員の提供する授業を単に「受ける」姿勢にとどまらず、学びの主体として自ら授業に積極的にかかわる存在でなければならない。そのために大学は、学修者が自ら最適な学びを選び取れるよう、LMS等に蓄積された学修に関する情報に容易にアクセスできる機能を強化するとともに、学内にできる限り多様な学修の機会や環境を用意することが重要となる。この方針のもと、以下により「いつでも・どこでも」ストレスなく学修できる基盤を整備する。

- (1) 「京都ノートルダム女子大学教育研究等環境整備方針」に沿って、教育高度化のための各種システムや装置など学内環境の整備・保守及び情報セキュリティ強化を行うとともに、FD・SD研修等による教職員のスキルアップとサポート体制の維持・向上を図る。
- (2) ノートPC、スマートフォンやタブレット端末など多様なデバイスを学修活動に活用するとともに、BYOD（Bring Your Own Device）を促進する。
- (3) LMSと入試・教務・就職など学内のシステムに蓄積された学生の情報とを連携させてポートフォリオ・学修成果の一元的把握機能を強化することにより、学修支援・キャリア形成支援を高度化する。
- (4) 学修の基盤となる読解力・文章作成力向上のためのサポート体制を強化するため、自習のためのスペース・無線アクセスポイントの維持・向上を図る。
- (5) 学修者の問題意識や意欲に応じた履修プログラムを提供し、オープンバッジ等により履修歴や修得した能力の可視化を可能とする。
- (6) 電子教科書及び電子書籍のシステムを授業内外で活用する。

3 情報技術を活用できる女性の養成

「情報活用力プログラム」の履修者を増やし、情報科学の知識・技能を身につけ、それらが社会に与える影響を理解した上で課題を発見し主体的に解決策を検討・実践できる人材を養成する。運営はND教育センターが担い、学士課程に準じて自己点検・評価を行い成果を検証する。

4 計画の推進・運営体制の強化

本計画では、学長、各学部・研究科、ND教育センターの長等で構成する「教学マネジメント会議」が教育課程編成等の全学的な方針策定及び成果の検証・改善を担う。同会議が決定する全学の方針に基づき、ND教育センター教育企画開発部門を中心とした関係部署で推進する。

5 DX推進計画において到達をめざす指標（2029年度までの5か年）

(1) DXを通じた授業の質向上

- 取組結果（アウトプット）＝効果的な授業方法に関するFD研修・研究会等を年2回以上開催する。
- 取組成果（アウトカム）＝授業アンケートにおける授業への満足及び主体的参加に関する項目について、「そう思う」が回答者の85%以上である。

(2) 学生の個別最適な学修の促進

- 取組結果（アウトプット）＝学修ポートフォリオに基づくリフレクションウィークにおいて指導教員が行う個別の面談又はフィードバックの実施率が70%以上である。
- 取組成果（アウトカム）＝学生調査における個別の学修に関する項目について、満足している学生が回答者の60%以上である。